

# 持続可能な観光地域経営における 文化継承と女性の役割 —ガストロノミーとシステミックデザインによる 統合的アプローチ—

## *The Role of Culture and Women in Sustainable Tourism Destination Management —An Integrated Approach through Gastronomy and Systemic Design—*

追手門学院大学 岡田 美奈子  
Otemon Gakuin University Minako OKADA

### Abstract

This study examines the role of culture and women in sustainable tourism destination management, with a particular focus on the potential of gastronomy tourism to enhance community well-being. While conventional sustainability frameworks emphasize the three pillars of economy, society, and environment, this research positions culture as a “fourth pillar” and highlights the significance of women’s food-related cultural practices in sustaining regional tourism development. The study identifies structural challenges in which women’s knowledge and practices that support regional food culture have been undervalued, and argues for repositioning women as “catalysts of regional transformation” rather than merely recipients of support. Furthermore, it demonstrates the effectiveness of systemic design as an integrated approach to addressing the increasingly complex challenges faced by tourism destinations. By adopting the shared perspective of “journeys of becoming” across culture, well-being, sustainable tourism, and systemic design, this research offers new theoretical and practical insights for destination management within the hospitality field, contributing to the development of community-based tourism.

Keywords : Sustainable Tourism Destination Management, Cultural Sustainability, Gender, Gastronomy Tourism, Systemic Design

### 1. はじめに

持続可能性は、1987年のブルントラント委員会報告書以降、国際的な政策と学術研究の中心概念として発展してきた<sup>(1)</sup>。従来、経済・社会・環境の三本柱を中心に議論されてきたが、近年、文化を「第四の柱」として位置づける必要性が指摘されている(Hawkes, 2001; UNESCO, 2013)<sup>(2)</sup><sup>(3)</sup>。文化は地域のアイデンティティや価値観、生活様式を形づくる独自の次元であり、持続可能性全体を支える根幹的要素である。

日本では、人口減少と高齢化の進行により、伝統文化・祭礼・郷土料理・伝統工芸などの継承が危ぶ

まれている。若年層の流出や後継者不足により、地域に蓄積された知識と実践が失われつつあり、地域社会のアイデンティティと持続可能性そのものが脅かされている。

このような状況において、地域の生活文化を基盤とする観光、とりわけガストロノミーツーリズムは、文化継承と地域活性化を両立し得る手段として注目されている。しかし既存の観光政策は経済効果に偏重しがちであり、文化継承という本質的側面を十分に考慮していない。また、地域の食文化を支える女性の役割も「家事労働の延長」として過小評価される傾向にある。

本稿では、これらの課題に対して、以下の三点を明らかにする。第一に、持続可能性研究における文化、特に地域に根ざした生活文化は、持続可能性と本質的に密接な関係を有する。第二に、地域の文化基盤としてのガストロノミーの継承において、女性と観光が重要な役割を果たし、それが地域および関係主体のウェルビーイングに寄与する。第三に、持続可能な地域づくりに伴う複雑かつ多層的な課題に対して、システムデザインは有効な統合的・実践的アプローチとなりうる。これらの仮説について、サステナビリティ、ホスピタリティ、ジェンダー、観光、ならびにシステムデザインに関する先行研究を横断的に検討し、理論的統合を図る。また、事例分析・考察を通じて、今後の課題を明示する。

## 2. 理論的枠組み(1):サステナビリティと観光

### 2.1 文化的サステナビリティの概念

持続可能性の概念は、1987年の国連ブルントラント委員会報告書において「将来世代のニーズを損なうことなく、現在世代のニーズを満たす発展」と定義され、国際的な政策指針として広く共有された<sup>(1)</sup>。その後、Elkington(1997)が経済・環境・社会の三つの次元を統合的に捉える「トリプル・ボトムライン」の概念を提唱し<sup>(4)</sup>、持続可能性を評価する枠組みとして学術界および実務界に広く受容された。しかし、この三本柱の枠組みでは文化的側面が体系的に位置づけられてこなかったという限界が指摘されている。

この課題に対して、Hawkes(2001)は文化を持続可能性の「第四の柱」として位置づける必要性を提起し<sup>(2)</sup>、文化が地域のアイデンティティ、社会的結束、創造性の基盤であり、持続可能性全体を支える根幹的要素であることを論じた。この視点は、文化を単なる社会的副次要素ではなく、持続可能性を構成する独立した価値の次元として捉え直すパラダイムの転換を意味する。こうした文化の再定位は国際的にも影響を及ぼし、UNESCO(2013)の「杭州宣言」において、文化が「持続可能な発展の推進要因かつ推進力である」と明示的に位置づけられた<sup>(3)</sup>。

その後の議論では、文化的サステナビリティが、文化を「保護・保存すべき対象」から「地域社会の再生を支える営み」へと再定義する方向で発展してきた。Soini & Birkeland(2014)は、文化的サステナビリティを「コミュニティが時間を超えて文化的アイデンティティ、伝統、価値観を維持・発展させる能力」と定義し<sup>(5)</sup>、文化継承を静的な保存ではなく動的なプロセスとして捉えている。文化的サステナビリティを実現するためには、文化を経済・環境・社会政策の中心に統合することが求められる<sup>(6)</sup>。文化は経済的価値の創出のみならず、地域住民の誇りやアイデンティティの源泉となり、地域への愛着と社会的結束を強化する<sup>(7)</sup>。

### 2.2 生活文化の概念とその重要性

日本をはじめ多くの地域社会では、人口減少や高齢化に伴い、方言、郷土料理、年中行事など、地域に根ざした生活文化の継承が困難になりつつある。これらの生活文化は、単なる昔からの習慣ではなく、地域の自然や社会のしくみ、人々の価値観に合わせて発展してきた“知恵の体系”として受け継がれてきたものである。Matarasso(2019)は、こうした無形文化の継承が次世代への地域の「文化的生態系」の持続に不可欠であり、その喪失は社会的連帯や地域のウェルビーイングの崩壊につながると指摘する<sup>(8)</sup>。

生活文化が地域の持続可能性に貢献するメカニズムは、三つの観点から整理できる。

第一に、環境的持続可能性の観点では、伝統的な生活文化に内在する環境知や自然資源の管理方法が、地域固有の生態系の維持に寄与する。

第二に、社会的持続可能性の観点では、生活文化が共同体のつながりや相互扶助の精神を育み、社会関係資本を強化する。

第三に、経済的持続可能性の観点では、生活文化が地域経済の基盤として機能し、地場産業や観光における価値創出に寄与する<sup>(5)</sup>。

このように、生活文化は地域社会における複数の持続可能性の観点を媒介しながら、文化的サステナビリティの中核となっている。Soini & Birkeland(2014)が指摘するように<sup>(5)</sup>、文化的サステナビリティとは、単に文化を保存する能力ではなく、「コミュニティが文化を通じて未来をデザインする能力」である。とりわけ、食に関わる実践は生活文化の中でも最も広範な参加を生み、世代間で継承されてきた領域である。こうした食文化は、観光との連関によってその価値が可視化され、継承を促す契機ともなっている。地域の生活文化を象徴するガストロノミーは、観光を通じて文化の意味を共有し、深化させ、あらゆる関係者を媒介する役割を担う。

次節では、このガストロノミーに焦点を当て、地域主体の観光との関係を検討する。

### 2.3 ガストロノミーを基盤とした地域主体の観光

ガストロノミーは、単なる「食」や「料理技術」を超えた、地域の歴史、自然、価値観、社会関係を体現する文化実践である。UNESCOは、無形文化遺産保護条約(2003)において食文化を無形文化遺産の対象として位置づけ、2010年には伝統的メキシコ料理、地中海食、フランスの美食などを無形文化遺産代表リストに登録した<sup>(9)</sup>。これにより持続可能性の基盤となる、文化資源としてのガストロノミーの重要性が強調された。文化的サステナビリティの視点からは、ガストロノミーは地域文化を維持し、コミュニティの結束を高め、生産・消費・祭礼・味覚実践などの文化価値を統合する媒介として機能する<sup>(10)(11)</sup>。

観光研究においては、「文化」は長く歴史建築や伝

統芸能など「見せる文化」として扱われてきたが、MacCannell (1976)が指摘するように<sup>(12)</sup>、近年は「モノを見る」から「人・暮らしに触れる」へと観光ニーズが変化し、「生活文化」に対する観光的価値が高まっている。一方で、観光が短期的利益の追求に向かうことで文化が商品化され、真正性が損なわれる危険性がある。Cohen & Cohen (2012)は、文化が観光のために「再創造」されることは必ずしも否定的ではなく、それがコミュニティにとって意味があり文化継承に資するものであれば、新しい形の真正性として認められると主張している<sup>(13)</sup>。すなわち、観光は、文化継承の阻害要因にも促進要因にもなり得る。その分岐点は、「外部による商品化」か「地域主体による再創造」かにある。

この観点からコミュニティベースド・ツーリズム (CBT)が注目される。生活文化を基盤とする CBT が地域の持続可能性に寄与する理由は主に三点である。

第一に、生活文化は、地域住民の日常の中に存在する「生きた文化」であるため、主導権は地域内部にあり続け、文化の再評価・再解釈を促す<sup>(7)</sup>。

第二に、生活文化は、多層的な地域資源体系から成り立つため、観光による効果は地域経済・社会・文化・環境への複合的な波及をもたらす。

第三に、CBT は、地域住民と観光客との文化的相互作用を創出し、文化継承における住民自身の主体性を回復する契機となる<sup>(14)</sup>。

このように、生活文化を基盤とする CBT は、地域経済の活性化だけでなく、地域社会の継続的な営みを支える手段として位置づけられる。

次節では、文化実践における主客の関係性とその持続性に注目し、ホスピタリティが、これらにどのように寄与しうるかを検討する。

## 2.4 関係性としてのホスピタリティ

ホスピタリティは、しばしば接遇行為やサービスの質として理解されてきたが、先行研究においては、それをより広い社会的・文化的実践として捉える視点が示されている。

Lashley (2008)<sup>(15)</sup>は、ホスピタリティを商業的行為に限定せず、家庭や地域社会における相互作用を含む社会的実践として位置づけている。また、Selwyn (2001)<sup>(16)</sup>は、ホスピタリティを文化的意味や社会関係を形成・維持する装置として捉え、その本質が「誰を、どのように迎え入れるか」という関係性の構築にあることを示唆している。Bell (2007)<sup>(17)</sup>も、ホスピタリティを道徳やアイデンティティと結びつけた関係の実践として論じている。

これらの先行研究から、ホスピタリティは、単なる行為や態度ではなく、他者との相互作用を通じて生成される関係性の質として理解することができる。すなわち、主客の関係が一時的・一方向的なものにとどまるか、あるいは相互承認と学習を伴う持続的

な関係へと発展するかは、ホスピタリティの質によって左右される。こうした視点から、本稿では、ホスピタリティを「関係性としての実践」として位置づける。質の優れたホスピタリティは、共通の価値観を育みながら関係を深め、心地よい交流を通じて、関わる人々のウェルビーイングにも寄与すると考えられる。こうした視座から、次章では、文化実践の担い手としての女性の役割、社会関係資本とウェルビーイングの関係性について検討する。

## 3. 理論的枠組み(2):

### 女性・社会関係資本・ウェルビーイング

#### 3.1 文化的実践の担い手としての女性

地域社会において、生活文化の継承を支える日常的な実践の多くは女性によって担われている。食、衣、祭礼、子育て、介護といった領域において、女性は世代間の媒介者として地域の記憶と実践を結びつけている<sup>(18)</sup>。特にガストロノミーは、地域の風土、歴史、宗教観、社会関係などを体現する象徴であり、家庭や地域コミュニティのなかで、女性が主導してきた分野である<sup>(19)</sup>。このような「文化実践としての料理」は、単なる生業や家事労働ではなく、地域社会の文化的アイデンティティを再生産する重要な営みである。

しかし、近代化と市場経済の発展に伴い、こうした文化的実践は周縁化されてきた。家事や料理などの活動は「無償労働」として経済的に不可視化され、観光や地域開発の文脈では「伝統の演出」として商品化される傾向が強まっている<sup>(22)</sup>。結果として、女性の文化的役割は象徴的には重視される一方で、実質的な資源配分や意思決定の場から排除されるという構造が生じている<sup>(21)</sup>。

#### 3.2 社会関係資本と心理的安全性

女性の活動を支える基盤として、社会関係資本の再生が不可欠である。Putnam (2000)は、社会関係資本を、「信頼」「互酬性」「ネットワーク」に基づく地域社会の協働を支える見えざる資本と捉え<sup>(22)</sup>、地域内部の結束を強める「ボンディング型」と地域外との関係を築く「ブリッジング型」に区別した。両者のバランスが地域の健全な発展に不可欠である。

特に、地域の女性たちが自発的に活動を行う際には、心理的安全性、すなわち「失敗しても罰せられない」「意見を安心して共有できる」環境が重要な条件となる<sup>(23)</sup>。もともと組織内のチーム・マネジメントの文脈で提唱されたこの概念<sup>(23)(24)</sup>の本質は、「相互信頼に基づく学習・協働の促進」にあり、地域社会における持続的な協働や共創にも共通する。地域コミュニティにおいて上下関係やジェンダーによる役割意識が根強く残る場合は、女性が新たな活動を提案すること自体が心理的リスクを伴う。したがっ

て、地域の文化継承を推進するためには、単に活動機会を提供するだけでなく、女性の発言や創造的挑戦を支える安全な関係性を構築しなければならない。

### 3.3 CBT、エンパワーメントとウェルビーイング

近年、CBT と地域ウェルビーイングの関係性が注目されている。Scheyvens (1999)は、観光が地域にもたらすエンパワーメントを経済的・心理的・社会的・政治的の四次元で捉える枠組みを提示した<sup>(25)</sup>。Mtapuri & Giampiccoli (2019)は、地域の主体性がウェルビーイング向上への鍵であることを明らかにした<sup>(26)</sup>。地域住民が意思決定の主体となることで、自己効力感や誇り、帰属意識といった心理的ウェルビーイングが向上する。この議論は、自己決定理論とも整合する。Deci & Ryan (2008)は、自律性、有能感、関係性の三つの基本的心理欲求が満たされることで、ウェルビーイングが向上すると主張している<sup>(27)</sup>。CBT において、地域住民が主体的に文化実践に関わり(自律性)、その実践が外部者から評価され(有能感)、地域内外の人々となつがる(関係性)ことで、これらの心理欲求が満たされる。

さらに、CBT は、社会関係資本を通じてウェルビーイングを向上させる。Helliwell & Putnam (2004)は、社会関係資本が豊かなコミュニティほど住民の幸福度が高いことを実証した<sup>(28)</sup>。CBT における共同調理、共食、文化交流といった実践は、Putnam (2000)のいう「ボンディング型」と「ブリッジング型」の双方の社会関係資本を同時に生成し<sup>(22)</sup>、地域全体のウェルビーイングを高める。ブリッジング型の強化により地域の多様性や包摂性を高め、外部人材や関係人口の関与を促進する<sup>(29)</sup>。多様な主体が文化実践を通じて緩やかにつながること、地域は新たな知識や資源を取り込みながら変化に対応しうる構造を形成していく。すなわち、社会関係資本の再生は、開かれた地域として進化し続けるための条件であり、文化を媒介とした持続可能な地域の基盤となる。

こうした構造において、特に、地域の食文化の担い手として、女性による活動は重要な役割を果たす。女性の活動が地域社会にもたらす価値は、ジェンダー平等や経済参加という観点にとどまらず、地域の多様な人々が共に学び、支え合う場を創出するという点にある。女性が主導する文化実践が世代や立場を超えた協働を促進し、地域の包摂性を高めている。

Blackstock (2005)は、CBT における女性の役割が、経済的自立だけでなく、コミュニティ内での発言力向上や自己実現につながることを指摘している<sup>(30)</sup>。主体的に文化を実践し、継承する活動に参加することで、地域住民は自己効力感や誇り、帰属意識を獲得する。また、観光客との対話や自らの生活文化が外部者から評価される経験は、生きがいや人生の意味の再発見につながる。これは、Diener & Seligman (2004)が提示した「主観的ウェルビーイング」(生活

満足度、ポジティブ感情、生きがい)の向上に直結する<sup>(31)</sup>。こうした動的な文化継承の機会が、社会関係資本の再構築を通じて、地域社会全体のレジリエンスを強化している<sup>(32)</sup>。

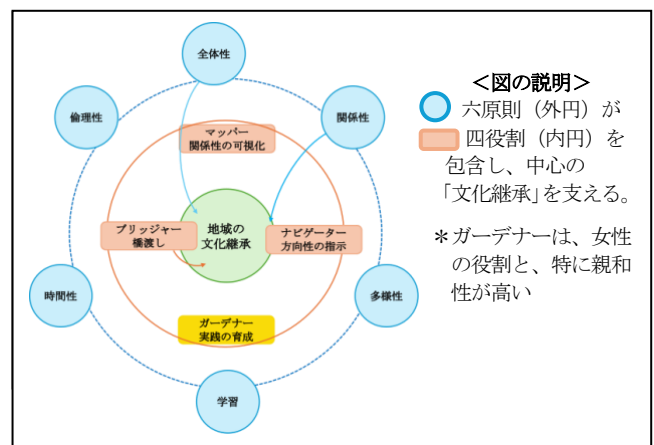
このように、生活文化を基盤とする CBT は、地域経済の活性化だけでなく、地域社会の継続的な営みを支える手段であり、地域の持続可能性とウェルビーイングの双方に寄与する。したがって、文化的サステナビリティを実現するためには、文化の担い手である女性を「支援の対象」ではなく「地域の変革の主体」として位置づけ直す必要がある。この視点の転換こそが、持続可能な観光地域経営において重要である。

## 4. システミックデザインの理論的枠組み

### 4.1 複雑性に対応しうるシステミックデザイン

地域の文化継承やガストロノミーをめぐる課題は、社会・経済・環境・文化の各側面が絡み合う「複雑系的状況」に属する<sup>(33)</sup>。こうした厄介な問題(wicked problems)を、システムとしての関係性から捉え直し、再構成することを目的とする実践的なデザイン手法が、システミックデザインである<sup>(34)</sup>。このアプローチは、従来のデザイン思考が問題解決をゴールとするのに対し、問いを再定義し、学びを重ねながら変化をし続ける、動的なプロセスとして地域課題に向き合う点に特徴がある。文化継承や観光、ジェンダーなどの終わりのない課題に対して、「継続する旅」のプロセスとして関わり続ける姿勢そのものが、サステナビリティの本質と重なる。

図1. システミックデザインの六原則と四つの役割



(出所) POLITECNICO DI TORINO (2023)<sup>(45)</sup>を基に筆者作成

### 4.2 六原則と四つの役割

システミックデザインの実践には、六つの原則が中核を成す<sup>(30)</sup>：(1)全体性、(2)関係性、(3)多様性、(4)学習、(5)時間性、(6)倫理性。これらの原則は、文化継承を「固定された伝統の継承」ではなく「変化を内包する生きた実践」と捉える考え方と一致す

る(図1)。なかでも、時間性と倫理性の観点、女性が担う日常的な実践と深く関わる。

また、システミックデザインが機能するためには、四つの役割が有機的に機能する必要がある<sup>(33)</sup> <sup>(35)</sup> : (1)システム・マッパー(関係性の可視化)、(2)ナビゲーター(方向性の提示)、(3)ブリッジャー(セクター間の橋渡し)、(4)ガーデナー(実践の育成)。特に「ガーデナー」の役割は、女性たちが地域の知恵や人間関係を日常的に「手入れ」し、文化を未来へとつなぐ存在として、文化継承と親和性が高い。

#### 4.3 持続可能な観光地域経営への適用可能性

持続可能な観光地域経営においてシステミックデザインが有効な理由は、主に三点に整理できる。

第一に、持続可能な観光地域経営の課題は、経済・社会・文化・環境の各領域が複雑に絡み合った「厄介な問題」であり、単一セクターや政策では対応が困難である。システミックデザインは、こうした複雑性を「関係性のデザイン」として捉え直し、全体最適の視点から解決策を設計する手法を提供する。

第二に、本研究で検討してきた文化的サステナビリティ、女性の役割、社会関係資本、ウェルビーイングといった要素は相互に関連しており、システミックデザインの枠組みによって統合的に扱うことが可能となる。特に「ガーデナー」としての女性の役割は、日常的な文化実践を通じて地域の関係性を育む点で、システミックデザインの中核的要素として位置付けられる。

第三に、システミックデザインは固定的な解決策を提示するのではなく、地域が学習し、変化し続けるプロセス(旅の継続)を支援する。これは、文化継承が動的なプロセスであることと整合し、観光地域が外部環境の変化に適応しながら持続可能性を維持するための方法論として適している。

次章では、こうした理論的枠組みを踏まえ、国内外の具体的事例を通じて、ガストロノミー・ツーリズムによる文化継承の実践を検討する。

### 5. ガストロノミーと地域再生の国際・国内事例

#### 5.1 イタリア:アグリツーリズムとスローフード

イタリアでは、1970年代以降の農村地域の過疎化を背景に、農業・観光・文化を統合する「アグリツーリズム」政策が展開された。1985年に法制化され、EU共通農業政策(CAP)とも連動して発展したこの制度は、農家が宿泊・食事・体験を通じて地域文化や農的生活を伝えるものである<sup>(36)</sup>。多くは女性が中心的に運営しており、家庭料理や地産地消の食文化を観光客と共有する実践が地域の社会関係資本や誇りの再生につながっている<sup>(37)</sup>。

1980年代後半、カルロ・ペトリニによる主導のもと始まったスローフード運動は、「良い(good)・きれい(clean)・公正(fair)」を理念として掲げ、

地域食材の保全、生産者と消費者の公正な関係構築、そして地域経済の再生を目指したものである<sup>(38)</sup>。この運動は、食文化を通じた地域の自立と誇りの回復を促した<sup>(39)</sup>。小規模生産者を支える「プレジディオ」制度は、地域固有の食文化を「生活文化としてのガストロノミー」として再定義するものであった<sup>(40)</sup>。

アグリツーリズムとスローフード運動の連携により、ガストロノミーは「地域の暮らしを味わう文化運動」としての性格を強めた。女性や高齢者が文化的知識の媒介者として活躍することで、彼ら自身の役割認識や自己効力感が高まり、心理的ウェルビーイングの向上にもつながっている。ただし、世代交代や観光による文化の商品化というリスクも内在しており、地域の主体性をいかに維持していくかが課題である。

#### 5.2 カナダ:食を媒介としたコミュニティの再生

カナダでは、食を通じた社会的包摂と地域コミュニティの再生に向けた取り組みが進展している<sup>(41)</sup>。都市部を中心に展開する「コミュニティ・フード・センター(CFC)」は、地域住民・自治体・NPOが協働して設立した社会拠点であり、調理教室、コミュニティガーデン、食育プログラムなどを通じて、食を媒介とした社会関係の再構築を目指している。CFCの使命は社会的な隔たりを縮めることにあり、人々が隣人と出会い、孤立感を減らすためにグループでの食事を重視している。これらの活動は、低所得層の食へのアクセス改善にとどまらず、「共食」による社会的排除の克服と、人々が連帯感と生きている実感を得られる場の創出をもたらしている。

一方、農村地域を中心とした「Farm to Table」運動は、生産者・シェフ・観光事業者・消費者が連携し、地域食材を活用したレストラン、教育、観光イベントなどを展開するネットワークである<sup>(42)</sup>。特にブリティッシュコロンビア州やオンタリオ州では、女性農業者や地域のNPOが中心となり、教育・観光・環境保全を横断する活動を展開している<sup>(43)</sup>。この運動は、Putnam<sup>(19)</sup>のいう「ブリッジング型社会関係資本」を創出するプロセスであり、ガストロノミーを通じた社会的イノベーションの場となっている。

CFCと「Farm to Table」は、都市と農村という異なる地域背景をもちながらも、いずれも「食を通じた関係性の再構築」を中核に据え、文化的サステナビリティを社会的包摂・ジェンダー平等・ウェルビーイングの観点から促進している点が注目される。

#### 5.3 熊本県人吉市球磨:農泊の進化モデル

熊本県人吉市球磨地域では、1990年代から女性グループを中心に、長年にわたりグリーンツーリズム(農泊)を展開し、地域文化の継承と観光振興を両立させてきた。1989年に本田節氏を発起人として地域女性により結成された「ひまわりグループ」による郷

土料理の研究や高齢者への弁当宅配ボランティアが起点となり、1998年には地産地消の農村レストラン「ひまわり亭」を開設した。「おばあちゃんの知恵・経験・技・感性」や地域の食材、古民家を活かし、「もったいない」をキーワードに食文化の継承と交流促進に取り組んだ。活動の広がりに伴い夫の理解と協力も得られるようになると、地域内の連帯がさらに強化され、農泊の取り組みは一層拡大した。

2003年には国の構造改革特区に指定され、農家民宿の開業要件が緩和された。2004年以降、大学生インターン受け入れなどを通じて外部者との交流が進み、農家民宿が増加、現在20軒以上が営業している。2017年には「食・農・人総合研究所リュウキンカの郷」を開所し、農村民泊や郷土料理教室などを通じて「食のエコミュージアム」を核とする地域一体での農泊地域づくりへと発展、全国から研修の依頼や視察が絶えない<sup>(44)</sup>。2019年度には一般社団法人を設立するなど取り組みの強化に向けて制度化を進めた。

30年以上にわたる継続的な活動の結果、外国人含む宿泊者数や体験者数は着実に増加しており、長期滞在化の傾向もみられるようになった。これらの活動は、住民間の協働を促進し、社会関係資本の再生と関わる人々のウェルビーイングにつながっている。

#### 5.4 滋賀県長浜市木之本町：発酵文化のブランド化

長浜市木之本町は、古くから酒蔵や醤油蔵が並び、各家庭で味噌や漬物作りが行われてきた発酵食文化の豊かな地域である。40年以上（400年の歴史的基盤あり）にわたり、「オカンの味」として家庭の発酵食が代々受け継がれてきた。

1980年に旧湖北町が県・国と共同で設立した農村婦人の家「赤松荘」に備えられた広い台所では、味噌やふなずし、漬物などの仕込みを通じて女性たち

が交流し、生活文化が共有されてきた。その後、公民館活動をはじめ複数の女性グループが立ち上がり、生活の知恵や発酵技術が細く長く受け継がれてきた。しかし、高齢化の進行により伝統的な発酵文化の担い手が減少し、地域文化の継承が課題となっていた。

2019年には、発酵文化を基軸に地域活性化を図る任意団体「ツボのソコ」が発足し、「きのもと発酵まつり」や「きのもとおかんの発酵しんぶん」などを通じた地域資源の可視化や外部への情報発の取り組みが始まった。2022年には、家庭で発酵文化を受け継いできた女性たちが「発酵オカン」を結成し、家庭の発酵技術の記録化に加えて、秘伝レシピを活かした商品の制作・販売、発酵食づくり体験、発酵弁当の提供、イベント出店、出版プロジェクトなど、本格的な伝承・発信活動を展開している<sup>(45)</sup>。地域の伝統・文化や暮らす人々の想いに共感する移住者も増加傾向にある。

こうした女性たちの活動は、家庭の味を守るだけではなく、発酵文化を地域アイデンティティの核として再編し、観光・交流人口の拡大や移住促進につながっている点が特徴的である。また、長年培われてきた「家庭の知恵」が地域社会に貢献する専門性として評価されることで、女性の自己効力感や生きがい向上にも寄与している。地域女性・若者・移住者といった異なる背景をもつ人々の協働により、地域社会における横断的なネットワーク形成と社会参加の機会が生まれ、今後の地域継承モデルとしても注目される。

今後は、次世代への技術継承を進めながら、地域固有の資源を活かすことで、木之本の発酵文化を国内外へ発信し、地域ブランディングと持続可能な地域づくりへの波及効果が期待される。

表1. ガストロノミーと地域再生の事例比較

事例	イタリア	カナダ	熊本県・人吉球磨	滋賀県長浜市・木之本町
活動の起点	1970年代	2000年代	1989年	40年以上前(400年の歴史的基盤あり)
近代組織化	1985年法制化	複数NPO	2019年法人化	2019年ツボのソコ 2022年発酵オカン
女性の中心的役割	◎	◎	◎	◎
制度等の支援	EU政策	自治体、NPO	構造改革特区(2003年)	クラウドファンディング、地域団体支援
社会関係資本	ボンディング・ブリッジング型	ブリッジング型重視	ボンディング・ブリッジング型	ボンディング・ブリッジング型形成中

(出所) Putnam, R. D. (2000)<sup>(19)</sup>, Rinaldi, Santucci, F. M. (2013)<sup>(36)</sup>, C. (2017)<sup>(37)</sup>, Sloan, P., Legrand, W., & Hindley, C. (Eds.). (2015)<sup>(38)</sup>, Fonte, M. (2006)<sup>(39)</sup>, Grasseni, C. (2014)<sup>(40)</sup>, Levkoe, C. Z. (2017).<sup>(41)</sup>, Feagan, R. (2007)<sup>(42)</sup>, Mount, P. (2012)<sup>(43)</sup>. 日本の事例は熊本県人吉球磨<sup>(44)</sup>, 長浜市木之本町<sup>(45)</sup>, および、ヒアリング等を基に筆者作成

### 5.5 考察:ガストロノミーによる文化実践と継承

事例から得られる重要な知見として三点をあげる。

第一に、成熟度の違いとスケールアッププロセスである。イタリアおよび人吉球磨は、小規模なコミュニティの文化実践から始まり、長期的取り組みを経て、組織化と制度的支援により地域全体へと活動が広がっている。カナダおよび木之本は、組織化等が進捗し外部連携やメディア露出が増加し、さらなる成長への段階にある。

第二に、制度的支援の重要性である。EU 政策、構造改革特区、一般社団法人の設立など、活動の継続性と拡大を支える制度的な枠組みが、成熟度と量的成果にも大きく影響している。

第三に、量的データの重要性である。取り組み成果を地域内外に発信していくために、量的データ等の蓄積などによる効果の見える化も必要である。

ただし、こうした文化継承を担う女性たちを中核とする動的プロセスを支えるには、主体の心理的安全性、信頼に基づく社会関係資本、地域全体の協働体制の構築等が不可欠である。このような解決が容易ではない複雑に絡み合う課題に対し、全体最適の視点から文化・社会・環境・経済の複雑系として地域を再デザインする手法として、「システムックデザイン」が有効であると考えられる。

## 6. システムックデザインの実践事例:ピエモンテ州

イタリアのピエモンテ州では、2020 年から 2023 年にかけて、Politecnico di Torino(トリノ工科大学)の研究チームが主導による地域づくりプロジェクトが実施された。このプロジェクトは、システムックデザインを活用した持続可能な観光地域づくりの先進事例として、学術的にも評価されている(46)(47)(48)。

### 6.1 プロジェクトの背景と枠組み

ピエモンテ州は、複数の UNESCO 世界遺産を有し、スローフード運動の発祥地としても知られ、ガストロノミーと文化遺産が地域アイデンティティの中核を成している。しかし、観光客の増加により、文化遺産の保全と観光開発の両立、地域住民の生活と観光需要の調整、過疎化と後継者不足といったいくつかの複雑な課題が顕在化していた。これらは相互に関連していることから、単一のセクターや政策では解決が困難な「厄介な問題」として認識されていた。

こうした背景のもと、2020 年からシステムックデザインのアプローチによる持続可能な地域への移行プロジェクトが開始された。トリノ工科大学の研究チームが主導し、地域の行政機関、観光事業者、文化遺産保護団体、農業生産者、地域住民が参画する協働プロセスとして展開された。

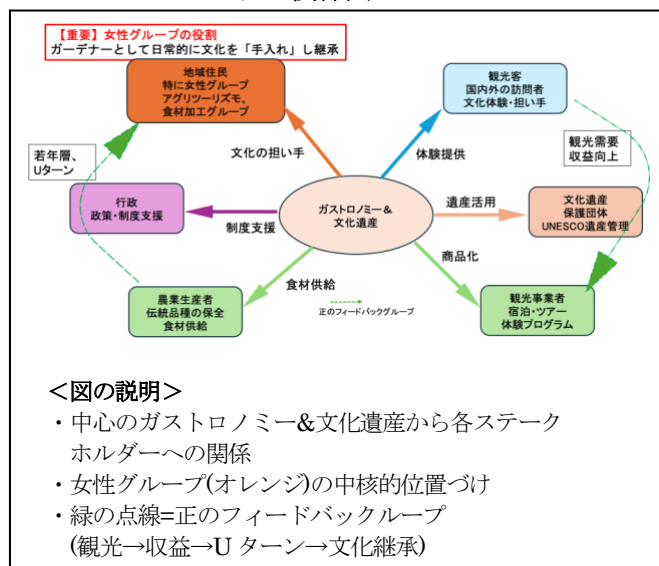
### 6.2 六原則・四役割の実践と成果

プロジェクトでは、システムックデザインの六原則が具体的に適用された(第4章・図1参照)。

全体性の観点から、文化遺産、観光、農業、ガストロノミー、地域コミュニティを相互に関連するシステムとして捉え、システムマップを作成した(図2)。関係性の観点から、観光客の増加が農業生産者の収益向上を促し、若年層のUターンにつながるという正のフィードバックループを設計した。多様性の原則では、特に地域の女性グループ(アグリツーリズム運営者、食材加工グループ)の知見が重視された。学習の原則では、小規模な試行と改善を繰り返す段階的アプローチを採用した。時間性では世代を超えた文化継承を、倫理性では地域住民の生活の質と文化遺産の保全を最優先とした。

四つの役割も明確に機能した。研究チームが「システム・マップパー」として関係性を視覚化し、プロジェクトコーディネーターが「ナビゲーター」として利害の調整を担った。行政、大学、企業、NPO が「ブリッジャー」としてセクター間を橋渡しし、地域の女性たち(特にアグリツーリズム運営者)が「ガーデナー」として日常的に地域の文化を「手入れ」し、次世代に継承する活動を継続した。

図2 ピエモンテ州プロジェクト  
ステークホルダー関係図



(出所) Politecnico di Torino (2023) (48) を基に筆者作成

プロジェクト開始から3年で、表2に示す成果が報告されている(49)。本事例は、システムックデザインが持続可能な観光地域経営において、主に、以下の点で有効であることを示した。

まず、複雑に絡み合う地域課題に対して、全体最適の視点から統合的な解決策を設計できることである。次に、多様なステークホルダーの協働を促進し、対立を創造的に解決できる点である。最後に、地域

住民(特に女性)が主体的に関与することで、持続可能性とウェルビーイングの双方を実現できる。ただし、このアプローチには時間と資源を要する。プロジェクト開始から具体的な成果が現れるまで2~3年を要し、継続的な取り組みと制度的支援(旅の継続)が不可欠である。

表2 ピエデモンテ州プロジェクトの主な成果

側面	主な効果
文化的	地域の食文化(チーズ、ワイン、トリュフ等)を核とした「食の遺産ツアー」確立、文化遺産と生活文化の統合的体験プログラム開発
経済的	小規模生産者の収益平均23%向上、若年層(35歳以下)の帰郷・定住増加
社会的	地域住民の観光に対する肯定的態度向上(52%→78%)、「文化の担い手」としての誇り回復
環境的	持続可能な農業実践(有機栽培、伝統品種の保全)推進、景観保全と生物多様性の維持

(出所) Politecnico di Torino,(2023)<sup>(48)</sup>を基に筆者作成

### 6.3 考察：システムミックデザインに求められる要件

事例から示唆されるように、システムミックデザインが機能するには、社会関係資本と心理的安全性が前提として必要である。この基盤が欠如すれば、対話は形式化し、デザインプロセスは停滞する。したがって、デザイン手法の導入以前に「関係のデザイン」を行う必要がある<sup>(48)</sup>。地域の女性たちが長年培ってきた信頼や互酬のネットワークは、システムミックデザインの「土壌」として重要である。文化実践を通じた手入れ(ケア)や共食の場は、心理的安全性を内包する小さな実践の場であり、そこから地域全体の関係性の再生へと波及していくのである。

観光分野においても、システムミックデザインは新たな可能性を提示する。地域の女性が担う日常の伝統食を中心としたガストロノミー実践や文化的なおもてなしは、観光客と地域住民の間に新たな関係性を生み出す触媒となる。これらを単なる「体験商品」ではなく、地域学習と共創の場として位置づけ直すことが、システムミックデザインの視座からの観光地域経営のあり方である。

ピエモンテ州の事例は、本研究で検討してきたガストロノミー、女性の役割、社会関係資本の要素が、システムミックデザインによって統合され得ることを実証しており、持続可能な地域経営においても同様のアプローチが有効である可能性を示唆している。

## 7. おわりに

### 7.1 本研究の理論的貢献

本研究は、文化的サステナビリティを「文化の保存」から「文化の動的継承」へと再定義し、地域社会の持続可能性における文化の役割を理論的に再検討した。その上で、ガストロノミーという生活文化の実践を手がかりに、CBT および女性が地域文化の継承において果たす役割を明らかにしつつ、社会

関係資本と心理的安全性を媒介として、地域のウェルビーイングの再生につながることを論じた。

本研究の理論的貢献として三点をあげる。

第一に、ガストロノミーを「生活文化の結節点(プラットフォーム)」として概念化し、文化継承の動的プロセスを明らかにした。第二に、女性の文化実践を「地域の変革の主体」として理論的に位置づけ、その活動が社会関係資本の拡大と地域のウェルビーイングの向上に果たす役割を、ジェンダーの視点から体系的に分析した。第三に、システムミックデザインの六原則を、文化的サステナビリティと地域経営の文脈に適用し、複雑に絡み合う地域課題に対する統合的アプローチとして提示した。これらの知見は、ホスピタリティを「関係性としての実践」として捉える視点を基盤としている。

### 7.2 ホスピタリティマネジメントへの実践的示唆

本研究で示された知見は、ホスピタリティマネジメントにおける文化資源の理解、地域マネジメントの視座、担い手支援、ならびにエビデンスに基づく意思決定の重要性を再考するものである。

#### (1) 文化資源の理解

文化資源を固定化された「展示物」としてではなく、住民が日常的に実践し更新し続ける生活文化として捉え直すことが求められる。文化継承を「継続する旅」として捉える視点は、その過程における試行錯誤や対話の積み重ねが、地域社会内部の社会関係資本や心理的安全性を醸成し、質の高いホスピタリティを支える基盤となることを示唆する。生活文化に根ざした実践は、訪問者との関係性を一時的な接遇にとどめず、相互承認と学習を伴う持続的な交流へと発展させる源泉である。

#### (2) 地域マネジメントの視座

経済効果中心の評価枠組みを超え、文化・社会・環境資本を統合的に捉える包括的アプローチが必要である。システムミックデザインの活用は、多様な主体間の関係性を編み直し、協働を促進することで、地域固有のホスピタリティ価値の創造につながる。ただし、システムミックデザイン手法の導入以前に「関係のデザイン」、すなわち信頼と互酬性に基づく社会関係資本の構築が不可欠である。この基盤があつてこそ、ホスピタリティが、関わる人々のウェルビーイングに寄与する関係実践として機能する。

#### (3) 担い手支援

地域の文化実践において重要な役割を果たす女性の貢献を可視化し、その役割を「ガーデナー」として積極的に評価する必要がある。女性を「地域の変革主体」として位置づけ、地域全体のウェルビーイングに貢献するその活動を持続的に支える仕組みを構築することは、ホスピタリティが社会的包摂性と多様性を高めるうえで不可欠である。女性たちが培ってきた信頼や互酬的ネットワークは、システムミ

クデザインを機能させる「土壌」であると同時に、訪問者を迎え入れる際の心理的安全性と文化的深みをもたらす基盤でもある。

#### (4) エビデンスに基づく意思決定

ホスピタリティマネジメントの高度化には、ウェルビーイング、社会関係資本、文化継承の実態を把握するための指標の整備とデータの活用が不可欠である。エビデンスに基づく意思決定を推進することで、ホスピタリティの質について、関係性の観点から評価し、地域住民と訪問者双方の価値を高める持続可能なマネジメントが可能となる。

これらの示唆は、ホスピタリティを単なるサービスの提供ではなく、地域の文化と社会関係が融合して織りなす総合的な価値創造のプロセスとして再定位するものである。本研究が提示する「関係性としてのホスピタリティ」という視点は、接遇技術や個人の努力ではなく、他者との相互作用がどのような質の関係へと発展するかに焦点を当てるものであり、持続可能な観光地域づくりに向けた新たな理論的・実践的基盤を提供する。

### 7.3 本研究の限界と今後の課題

本研究の限界として、主に三点をあげる。第一に、独自のフィールドワークや統計的検証が限定的である。今後は、文化継承・ジェンダー・社会関係資本・ウェルビーイングの関係性を定量・定性的に検証する必要がある。第二に、「心理的安全性」や「社会関係資本」は地域によって大きく異なるため、包摂性の視点を取り入れた多様な地域での比較研究が必要である。第三に、システムックデザインの方法論的な体系化と評価手法の開発、ホスピタリティ産業で実装可能なツールの開発等が今後の課題である。

本研究は、文化的サステナビリティ・ジェンダー・ウェルビーイング・観光・システムックデザインを「旅の継続」として統合する新たな視座を提示した。持続可能な観光地域づくりにおいては、女性の文化的実践を地域戦略の中核に位置づけ、地域のレジリエンスとウェルビーイングを支える基盤の資本として評価することが求められる。

#### 注

- (1) WCED. (1987). *Our common future*. Oxford University Press.
- (2) Hawkes, J. (2001). *The fourth pillar of sustainability: Culture's essential role in public planning*. Cultural Development Network.
- (3) UNESCO. (2013). *The Hangzhou declaration: Placing culture at the heart of sustainable development policies*. UNESCO.
- (4) Elkington, J. (1997). *Cannibals with forks: The triple bottom line of 21st century business*. Capstone Publishing.

- (5) Soini, K., & Birkeland, I. (2014). Exploring the scientific discourse on cultural sustainability. *Geoforum*, 51, pp. 213–223.
- (6) Duxbury, N., Kangas, A., & De Beukelaer, C. (2017). Cultural policies for sustainable development: Four strategic paths. *International Journal of Cultural Policy*, 23(2), pp. 214–230.
- (7) Ray, C. (1998). Culture, intellectual property and territorial rural development. *Sociologia Ruralis*, 38(1), pp. 3–20.
- (8) Matarasso, F. (2019). *A restless art: How participation won and why it matters*. Calouste Gulbenkian Foundation.
- (9) UNESCO. (2003). *Convention for the Safeguarding of the Intangible Cultural Heritage (2003)*. Retrieved November 15, 2025, from <https://ich.unesco.org/en/lists> (2025年11月15日最終閲覧)
- (10) Bessière, J. (1998). Local development and heritage: Traditional food and cuisine as tourist attractions in rural areas. *Sociologia Ruralis*, 38(1), pp. 21–34.
- (11) Sims, R. (2009). Food, place and authenticity: Local food and the sustainable tourism experience. *Journal of Sustainable Tourism*, 17(3), pp. 321–336.
- (12) MacCannell, D. (1976). *The tourist: A new theory of the leisure class*. Schocken Books.
- (13) Cohen, E., & Cohen, S. A. (2012). Authentication: Hot and cool. *Annals of Tourism Research*, 39(3), pp. 1295–1314.
- (14) Salazar, N. B. (2012). Community-based cultural tourism: Issues, threats and opportunities. *Journal of Sustainable Tourism*, 20(1), pp. 9–22.
- (15) Lashley, C. (2008). Studying hospitality: Insights from social sciences. *Scandinavian Journal of Hospitality and Tourism*, 8(1), 69–84.
- (16) Selwyn, T. (2001). An anthropology of hospitality. In C. Lashley & A. Morrison (Eds.), *In search of hospitality: Theoretical perspectives and debates* (pp. 18–37). Butterworth-Heinemann.
- (17) Bell, D. (2007). The hospitable city: Social relations in commercial spaces. *Progress in Human Geography*, 31(1), 7–22.
- (18) Bourdieu, P. (1977). *Outline of a theory of practice*. Cambridge University Press.
- (19) Counihan, C., & Van Esterik, P. (Eds.). (2013). *Food and culture: A reader (3rd ed.)*. Routledge.
- (20) Tronto, J. C. (2013). *Caring democracy: Markets, equality, and justice*. New York University Press.
- (21) UN Tourism. (2019). *Tourism for development – Volume I: Key areas for action*. UN

Tourism.

- (22) Putnam, R. D. (2000). Bowling alone: The collapse and revival of American community. Simon & Schuster.
- (23) Edmondson, A. C. (1999). Psychological safety and learning behavior in work teams. *Administrative Science Quarterly*, 44(2), pp. 350–383.
- (24) Schein, E. H., & Bennis, W. G. (1965). Personal and organizational change through group methods: The laboratory approach. Wiley.
- (25) Scheyvens, R. (1999). Ecotourism and the empowerment of local communities. *Tourism Management*, 20(2), pp. 245–249.
- (26) Mtapuri, O., & Giampiccoli, A. (2019). Tourism, community-based tourism and ecotourism: A definitional problematic. *South African Geographical Journal*, 101(1), pp. 22–35.
- (27) Deci, E. L., & Ryan, R. M. (2008). Self-determination theory: A macrotheory of human motivation, development, and health. *Canadian Psychology*, 49(3), pp. 182–185.
- (28) Helliwell, J. F., & Putnam, R. D. (2004). The social context of well-being. *Philosophical Transactions of the Royal Society B*, 359, pp. 1435–1446.
- (29) Granovetter, M. S. (1973). The strength of weak ties. *American Journal of Sociology*, 78(6), pp. 1360–1380.
- (30) Blackstock, K. (2005). A critical look at community based tourism. *Community Development Journal*, 40(1), pp. 39–49.
- (31) Diener, E., & Seligman, M. E. P. (2004). Beyond money: Toward an economy of well-being. *Psychological Science in the Public Interest*, 5(1), pp. 1–31.
- (32) Duxbury, N., & Jeannotte, M. S. (2017). Culture and sustainable development: How cultural policy contributes to sustainability. In E. Kagan et al. (Eds.), *Sustainability: Approaches and insights*, pp. 73–95, Springer.
- (33) Design Council. (2021). Beyond net zero: A systemic design approach. Design Council.
- (34) Jones, P. H. (2014). Systemic design principles for complex social systems. In G. Metcalf (Ed.), *Social systems and design*, pp. 91–128. Springer.
- (35) Sevaldson, B. (2017). Redesigning systems thinking. *FormAkademisk*, 10(1), pp. 1–23.
- (36) Santucci, F. M. (2013). Agritourism for rural development in Italy: Evolution, situation and perspectives. *British Journal of Economics Management & Trade*, 3(3), pp. 186–200.
- (37) Rinaldi, C. (2017). Food and gastronomy for sustainable place development: A multidisciplinary analysis of different theoretical approaches. *Sustainability*, 9(10), p. 1748.
- (38) Sloan, P., Legrand, W., & Hindley, C. (Eds.). (2015). *The Routledge handbook of sustainable food and gastronomy*. Routledge.
- (39) Grasseni, C. (2014). Seeds of trust: Italy's Gruppi di Acquisto Solidale (Solidarity Purchase Groups). *Journal of Political Ecology*, 21, pp. 178–192.
- (40) Fonte, M. (2006). Slow food's presidia: What do small producers do with big retailers? In T. Marsden & J. Murdoch (Eds.), *Between the local and the global: Confronting complexity in the contemporary agri-food sector*, pp. 203–240. Elsevier.
- (41) Levkoe, C. Z. (2017). The food movement in Canada: A social movement network perspective. *The Journal of Peasant Studies*, 44(3), pp. 593–614.
- (42) Feagan, R. (2007). The place of food: Mapping out the “local” in local food systems. *Progress in Human Geography*, 31(1), pp. 23–42.
- (43) Mount, P. (2012). Growing local food: Scale and local food systems governance. *Agriculture and Human Values*, 29(1), pp. 107–121.
- (44) 一般社団法人隠れ里ひとくまツアーリズム. (2025). 食・農・人総合研究所 リュウキンカの郷. <https://ryukinka.com/> (2025年11月15日閲覧). なお、本節の記述は現地関係者へのヒアリングに基づく。
- (45) 長浜広域観光協議会. (2025). 約400年、代々引き継がれてきたオカンの味. <https://nagahama-koukaiki.com/okan/>; COCO SHIGA. (2025). 滋賀に移住した8人が田舎をサバイブ!?. <https://cocoshiga.jp/official/topic/ikahacchin/> (いずれも2025年11月15日閲覧). なお、本節の記述は2025年11月に実施した「発酵オカン」メンバーおよび関係者へのヒアリングにも基づく。
- (46) Aulisio, A., Barbero, S., & Pereno, A. (2023). Design research towards socio-technical complex systems: A designerly systemic impact of tourism value-chain. *Blucher Design Proceedings*, 11(4), pp. 759–770.
- (47) Pereno, A., & Barbero, S. (2020). Systemic design for territorial enhancement: An overview on design tools supporting sociotechnical system innovation. *Strategic Design Research Journal*, 13(2), pp. 331–348.
- (48) Politecnico di Torino. (2023). Systemic design for territorial transition: UNESCO World Heritage Sites in Piedmont (Master's thesis). PoliTesi.
- (49) Manzini, E. (2015). *Design, when everybody designs: An introduction to design for social innovation*. MIT Press.